

□ レコード (CD&DVD)

諸石幸生

クラシックの世界は、一時期の不況感を乗り越えながら、日本らしい前向きな姿を見せ始めたといえよう。これはCDの発売数から言えることであり、一見、顕著であった邦人の若手演奏家による名刺代わりのようなCD制作が落ち着いて、CDはあくまでも作品主体に聴くものである、といったリリース状況に変わってきた点などにも確認されよう。

「レコード・イヤー・ブック2019」により、昨年のクラシックの総発売数を見てみよう。

	新譜	旧譜(再発)	計
交響曲	96 (119)	190 (123)	286 (242)
管弦楽曲	30 (53)	94 (90)	124 (143)
協奏曲	53 (70)	82 (62)	135 (132)
室内楽曲	53 (97)	28 (70)	81 (167)
器楽曲	190 (285)	53 (127)	243 (412)
オペラ (全曲盤)	2 (12)	16 (20)	18 (32)
音楽史	44 (-)	30 (-)	74 (-)
現代曲	34 (-)	0 (-)	34 (-)
ビデオ	30 (-)	35 (-)	65 (-)

() 内は、2017年度の実績

この一覧から読みとれることは、室内楽曲の半数の減少と、器楽曲大幅な減少である。だが、他の分野の減少振りも顕著であり、全体としては低調で、盛り上がりには欠けた一年であったといえよう。しかし、細かく見ていくと面白い傾向も確認される。たとえば、音楽史であるが、近年の古楽復興を反映してか、中々興味深いCDが並んでいるし、現代曲部門では、何があってもおもしろくない現代という時代を、映し出すかのような作品が並んでおり興味深い。こうした中で、第56回「レコード・アカデミー賞」が決定された。「大賞・金賞」は、テオドール・クルレンツィス率いるムジカエテルナによるマラー：交響曲第6番《悲劇的》となった。クルレンツィスといえば、昨年の「レコード・アカデミー賞」でチャイコフスキー：交響曲第6番《悲愴》が「大賞・金賞」に輝いているし、モーツァルト：《ドン・ジョヴァンニ》も「大賞・銀賞」を受賞している。ところで、今回の受賞曲マラーの録音は2016年7月と些か古いのが、セッション録音によって、入念に作り込まれた演奏として、完成されたものである。クルレンツィスは「私たちはこの作品について長い時間をかけて思いを深め、準備を経たうえで録音に臨みました。第3楽章アンダンテのような、技術的にはそれほど込み入っていない部分においても、リハーサルにはたっぷりと時間をかけて、特別な意味合いを持つように心がけました。ここでマラーは、自らの悲しみについて親密に語りかけているのだと思います。その悲しみは『悲劇の美』とでもいうものの象徴でもありましょう。マラーのこの偉大な傑作についての私たちの解釈がこのように認められたことは大変嬉しいことですし、2019年2月に日本で初めて演奏できることを心待ちに

しています。」と語っている。いずれにしても、クルレンツィスが2年連続して「レコード・アカデミー賞」の「大賞・金賞」に輝いたのは、歴史上初めてのことである。「大賞・銀賞」は、「室内楽部門/ドビュッシー/最後の3つのソナタ集」である。これは、ヴァイオリン=イザベル・ファウスト、ピアノ=アレキサンドル・メルニコフ、フルート=マガリ・モニエ、ヴィオラ=アントワヌ・タメステイ、他による演奏である。そして「大賞・銅賞」は、オペラ部門/ドビュッシー：歌劇『ペレアスとメリザンド』全曲となった。これはサイモン・ラトルが2016年1月ロンドンのバービカン・ロンドンで演奏会形式による上演をライブ収録したもので、主な出演者は、ゲルハーヘル（ペレアス）、コジェナー（メリザンド）、フィンリ（ゴロー）、である。また、ラトルは「このオペラは、この世に存在する音楽作品の中で、最も中毒的な魅力に満ちたもので、音楽というより、ドラッグであるとすら言えるかもしれません。私が一番多く演奏してきたのがこのオペラです。」と語り、演奏はかつてないほどにドラマティックなものとなっている。

続いて、部門賞に移るが「管弦楽部門」では、ラヴェル：バレエ《マ・メール・ロワ》全曲、《シェエラザード》序曲、クーブランの墓を録音したロト指揮、レ・シエクルの演奏。次に、「協奏曲部門」では、バティアシュヴェイリのヴァイオリンとネゼ=セガン指揮ヨーロッパ室内管弦楽団との「プロコフィエフ・アルバム」、器楽曲部門では、メルニコフがシューベルト、ショパン、リスト、ストラヴィンスキーを4台のピアノで弾き分けたもの。「声楽部門」では、ビオーの《夢想のおもむくところ》、「音楽史部門」では、酒井淳が（gamb）のクーブラン：ヴィオール組曲第1、2番。「現代曲部門」では、タメステイによるヴィトマン：ヴィオラ協奏曲他、に決定された。

以上が、2018年度の「レコード・アカデミー賞」の結果であるが、勿論この他にも優れたCDは数多くあった。2018年はバーンスタインのメモリアル・イヤーでもあり、様々な記念CDがリリースされた。そうした中で、パッパノがリリースしたバーンスタインの交響曲全集（ワーナー）や、ツィメルマンのピアノ、ラトル指揮ベルリン・フィルによるバーンスタインの交響曲第2番「不安の時代」（DG）は特に優れていた。また、メシアンの「世の終わりのための四重奏曲」（デッカ）、ヘンデル/アリア集（DG）、ストラヴィンスキーの「春の祭典」（デッカ）、ドビュッシーの交響詩「海」と管弦楽のための《映像》（エラート）、ラフマニノフの前奏曲全集（HM）、バユのソロ（ワーナー）、芥川也寸志の交響曲第1番、「交響三章」（EXTON）、と言ったCDは特筆されるべきものであろう。

CDというメディアが今後何年続くのかは不明であるが、近年はSACDとのハイブリッド・ディスクとしてリリースされるケースも増えてきた。しかも、こうした動きに触発されたのか、ブルーレイ・ディスクも発売されるという状況である。CD、SACD、ブルーレイ・ディスクはすべて12センチという企画で統一されている。だが、今日発売されているハードには、これら3つの方式に対応しているものが少ないということである。こうした企画の統一も図るべき課題であろう。